



2014年6月 特設コーナー

「蔵書印の愉しみ」

国文学研究資料館では、昭和47年の創設以降、研究・事業の一環として国内外における文献調査、マイクロフィルムや原本による収集・保存活動を行ってきた。これらの資料は、昭和52年閲覧サービス開始、昭和62年オンライン検索サービス開始といった節目を経て、今日に至るまで管理・提供されてきている。とりわけ書誌レコード作成要領に基づく精緻な目録作成を長年に亘り継続してきた事業には、印記を採録するという指針があり、そのことにより典籍に捺された蔵書印等の伝来情報を得ることができる。

平成24年に公開を開始したNIJL「蔵書印データベース」は、上述の伝来注記（印記）を元に原本にあたって印文情報等を更新し、印影を蓄積したものがベースとなっている。

今回の展示では、これまで陽の当たることの少なかった蔵書印を中心にとりあげ、印影とその背景にある様々な情報を“読む”ことの愉しみを、お伝えできればと願っている。

（国文学研究資料館・研究部 青田寿美）

目次

東京大学附属図書館移管資料の蔵書印	1
印影あれこれ	2
書癖と印癖	3
蔵書への思い ――印影を“読む”	4
出品目録	5

展示ケース1：東京大学附属図書館移管資料の蔵書印

当館開館から4年目にあたる昭和50年、東京大学附属図書館から「南葵文庫」旧蔵本をはじめとする重複版本類を受け入れることになった。管理換えされた重複本は12,612冊にのぼる（国文学研究資料館『十年の歩み』参照）。これらの資料群には、東京帝国大学の蔵印と併せ、複本であることを示す鉛筆書「複-」が確認できる。特筆すべきは、大正12年の関東大震災で全焼壊滅した東京帝国大学附属図書館復興のため、各界の識者・篤志家から寄せられた蔵書が、国文研への移管本に多数含まれていることである。東大図書館の復興を願い集積された典籍、その一部が時を経て、新興の国文学研究資料館の収蔵庫を豊かに形成すべく、移動していく。復興と新興、2つの文化史的メルクマールを根幹から支えた寄贈図書の一断面を探ってみたい。

印 文：隈山谷氏

使用 者：谷干城（1837-1911 陸軍軍人・政治家、号 隈山）

採取資料：『宕陰存稿』（請求記号：ナ8-25-1～6）



現在 NIJL「蔵書印データベース」には当該印が3レコード収録されている。いずれも谷儀一からの寄贈であることを示す東京帝国大学図書館の寄贈受入印「寄贈 大正十三年七月十五日 谷儀一氏」を併捺。儀一の養祖父が谷干城である。ちなみに、東京大学附属図書館に「谷文庫」あり、谷干城の旧蔵書を大正13年7月5日に谷儀一が寄贈したもの。上掲の儀一寄贈受入印の日付とも合致する。谷文庫の一部、あるいは文庫から除外され一般書扱いとなったものの一部が、当館に移管されたとみるべきか。東大「鷗外文庫」本にも類例あり。

印 文：上田貞印 士幹氏

使用 者：上田章（1833-1881 紀州徳川家家扶、諱 貞固・^{いみな}字 士幹^{あざな}）

採取資料：『古刀銘集録』（請求記号：ラ8-17）



本資料は、章没後に上田家で作成したと思しき「上田章遺書」印を併捺。同一印は参考出陳の『新安手簡』（ヤ5-38-1～5）にもみえる。なお、『新安手簡』は、上田章の蔵書目録と認められる仮綴じ冊子「書目」（国文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」収録「〔書類一式〕」（文献コード：UDMO-00025）のうち）に書名が確認できる。（展示パネル参照）また、東京大学附属図書館蔵『活所備忘録』（印記：「上田章遺書」「南葵文庫」）も、上掲「書目」に記載あり。印章使用者の蔵書目と押捺資料書名との照合同定が可能な例として、蒐書傾向や時期等を考察する上でも興味深い。上田章遺書は、主君の紀州徳川家に譲渡された後、東京帝国大学図書館の震災復興を機に「南葵文庫」蔵書として移動、その後、新設の国文学研究資料館に益する目的で移管する複本類に含まれ、当館収蔵に至ったと考えられる。

展示ケース2：印影あれこれ

[参考]

印文の読み順は通常、 右上 右下 左上 左下で、
右縦書きの書字順だが、 となる回文印や、
意匠を凝らした刻印例のいくつかを紹介する。



印 文：臣準助印 梅所

使 用 者：西島樸所 (1861(?)-1935 朱子学者、別称 準之介)

採取資料：『漁村文話』(請求記号：87-476)

陰刻(白文)と陽刻(朱文)からなる連珠印のうち、陰刻印が回文になっている。参考出陳の『名草の浜つと』(51-531)巻末の「石上三季」も回文印(使用者不詳)。「石の上にも三年」のことわざを刻した遊印。遊印とは、詩文や故事成語等の好みの語句や絵を刻した印章のことで、書画の落款と併せ用いられるが、典籍に鈐した例もしばしば見られる。また、参考出陳『好古小録』(ナ5-75-1~2)には、刷り印であるが、珍しい鏡文字印「藤原貞幹」あり。

なお、右掲の印影に併捺された朱文方印「西嶋氏記」は、『増訂 新編蔵書印譜』では樸所の曾祖父西島蘭溪所用印として立項される。しかしながら、展示資料は明治刊本であり印泥からみても西島樸所による押捺と判断できる。明治11年刊『漁村文話』(87-475)にも「西嶋氏記」印あり、樸所の押捺例を複数確認し得た。或いは、西島家代々の所用印とすべきか。



印 文：吾唯知足

使 用 者：不詳

採取資料：『集古印譜』(請求記号：56-7)

中心の「口」の字を上下左右の四字で共有する意匠。本印も遊印の一つで、龍安寺の“知足の蹲踞”^{つくばい}で知られる禅語「吾唯知足(われ、ただ足るを知る)」に拠る。展示資料は印譜であるが、典籍への実捺例も「蔵書印データベース」内に数例収録がみられ、好まれた文言であることがわかる。



[参考]



展示ケース3：書癖と印癖

文人の中には書画の落款印や蔵書印として所用の印類を多数有する者、時にはコレクターとして一家をなす者もある。生涯に500余の自用印を蔵した富岡鉄斎は「余に印癖有り」と語り、印章コレクションで知られる市島春城は1,000顆近くを集め「印狂」を自称したという。鉄斎・春城に及ばぬまでも、書癖と併せ印章を愉しんだ文人をとりあげ、典籍への押捺例を展観する。

印 文：霞亭珍玩

使用 者：渡辺霞亭(1864-1926 小説家・新聞記者)

採取資料：『名所都鳥』(請求記号：99-24-1~8)

『絵本時世粧』(請求記号：99-113-1~2)

(展示替えあり)



当館所蔵資料では、現在2点の典籍で押捺が確認できる。

いずれも貴重書指定の『名所都鳥』(右掲画像分)『絵本時世粧』である。

東京大学附属図書館蔵「霞亭文庫」で知られる渡辺霞亭は、

“江戸期板本の蒐集において随一”(『近代蔵書印譜』)と謳われ、その所用印も多彩であったが、比較的良好に目にする朱文長方印「霞亭文庫」・朱文方印「渡邊蔵書」とは別して、とりわけ珍重すべき典籍にのみ「霞亭珍玩」を鈐していたことがわかる。

印 文：名古屋市桑名町通本重町下ル西側服部石仙

使用 者：服部石仙(1864-1920 名古屋四条派の日本画家)

採取資料：『古今和歌集』(請求記号：ラ6-23)



個人が1点の資料に押捺した蔵書印数としては他に類を見ない、33種類の印影が確認できる。(展示パネル参照)

なお、住所印を典籍に鈐する例としては、大惣の名で知られる貸本屋の印「長島町五丁目大野屋惣八」をはじめとする書肆印に多い他、個人の蒐書家所用印でも「大阪市西区北堀江下通三丁目六七小栗仁平」、「東京牛込区大久保余丁町百拾貳番地坪内雄蔵」等、散見される。

展示ケース4：蔵書への思い ――印影を“読む”

蔵書印とは、コレクターが自らの蔵書に捺してその所有を示す印影のことである。「蔵書」「文庫」「珍藏」「之印」といった印文が一般的であるが、時には蒐書家の万感の思いを託した長文が刻され、典籍に捺された例も少なくない。参考出陳として示した朱文長方印「不敢伝吾子孫 河野氏図書」(『寸碧樓詩稿』87-311-1~2)、堤朝風の蔵書票「第一と第二のゆひもてひらくへし其よみたるさかひにをりめつけ又爪しるしする事なかれ」(『朝風集』ナ2-176)等、警句として見るべきものといえる。ここでは、災禍から蔵書を守り得た愛惜の念が込められた2顆を紹介し、該印押捺以前・以後と幾星霜を経た古典籍が、今、此処に、伝えられてあることの軌跡と歴史を、印影と共に辿りたい。

印 文：明治三十年八月由熊本帰誤落行李於海此本為所浸湿者
使用 者：内田周平(1854-1944 崎門学派・東洋哲学者、号 遠湖)
採取資料：『薄遊漫載』(請求記号：ナ8-342-1~2)

明治30年8月、内田遠湖は5年間奉職した熊本の第五高等学校教授を辞し、浜松に帰郷。老親を慰藉するためであったという。途次、書籍を詰めた行李を誤って海に落とし海水に浸らせる失策、その記念にと作られた風趣ある印文。展示箇所は乾・坤二巻の巻頭だが、坤巻は水濡れ・黴跡が顕著で当時の状況を彷彿とさせる。なお、公益財団法人無窮会所蔵・内田遠湖旧蔵資料のうち『老子ろうし麤けんさいこう齋口義』他に同一印の押捺が確認でき、本書と共に海路携行の書冊と知れる。



印 文：昭和二十年四月十三日夜壕中ニ於テ戦災ヲ免レタル図書 茂
使用 者：望月茂(1888-1955 評論家・編集者、号 紫峰)
採取資料：『拙齋小集』(請求記号：87-310-1~4)

「四月十三日帝都空襲にて、到頭一家丸焼にて、当地に只今立退き候、物は失い候へども、全員無事、心は傷付けず候間、ご休心被下度候。」(昭和20年7月15日付・原茂貞宛書簡、望月千枝編『紫峰 望月茂を偲ぶ』)と気丈に認めた望月茂だが、貴重な典籍が為す術もなく焼尽する様を折にふれて思い出し「あの家からは、金色の烟が出たナァ。」と、万感の思いを込めて語ったという。巣鴨の自宅庭防空壕にて焼け残った書籍を、疎開先の茨城県筑波郡まで運び、「金色の烟」になることを免れ得た蔵書の一点一点を慈しみ、手ずから捺した印。

没後、蒐集した史資料のうち郷土・土浦関係は土浦市立図書館に寄贈、のち土浦市立博物館に移管。「望月茂文庫」の書冊多数に本印押捺あり。



出品目録

資料名	著者	年代等	請求記号
『宍陰存稿』（大本6冊）	塩谷宍陰、塩谷簀山	慶応3 芳野金陵序、明治3刊	ナ8-2 5-1 ~ 6
『古刀銘集録』（横本1冊）	田中清房	天保9刊	ラ8-1 7
『新安手簡』（大本5冊）	新井白石、安積澹泊、立原翠軒	（天明年間刊）	ヤ5-3 8-1 ~ 5
『漁村文話』（半紙本1冊）	海保漁村	嘉永5 梨本宥跋、明治刊	8 7-4 7 6
『漁村文話』（半紙本1冊）	海保漁村	嘉永5 森蔚序、明治11刊	8 7-4 7 5
『名草の浜つと』（大本1冊）	本居大平	写本	5 1-5 3 1
『好古小録』（大本2冊）	藤原貞幹	寛政7刊	ナ5-7 5-1 ~ 2
『集古印譜』（1冊）		写本	5 6-7
『名所都鳥』（半紙本8冊）		元禄3刊	9 9-2 4-1 ~ 8
『絵本時世粧』（2冊）	歌川豊国(一世)	享和2刊	9 9-1 1 3-1 ~ 2
『古今和歌集』（特小1冊）	紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑	文明18牡丹花奥書、刊本	ラ6-2 3
『寸碧樓詩稿』（大本2冊）	奥野小山	弘化5刊	8 7-3 1 1-1 ~ 2
『朝風集』（大本1冊）	堤朝風	写本	ナ2-1 7 6
『薄遊漫載』（中本2冊）	三宅橘園	文化10跋、文化11刊	ナ8-3 4 2-1 ~ 2
『拙斎小集』（大本5冊）	青山延于	弘化2 青山延寿跋、嘉永1刊	8 7-3 1 0-1 ~ 4

展示資料は全て国文学研究資料館蔵
資料保護のため展示替えを行います

[参考文献]

- 『十年の歩み』（国文学研究資料館編、国文学研究資料館、1982.10）
- 『増訂 新編蔵書印譜』上中（渡辺守邦・後藤憲二編、青裳堂書店、2013.10-2014.2）
- 『市島春城印章コレクション総目録』（浅井京子編、早稲田大学會津八一記念博物館、2008.5）
- 「紅霞山房印話」『市島春城古書談叢』（市島春城著、青裳堂書店、1978.8）
- 『近代蔵書印譜』初編～5編（中野三敏・後藤憲二編、青裳堂書店、1984.12-2007.2）
- 『霞亭文庫目録』（東京大学総合図書館編、雄松堂書店、1982.3）
- 「内田遠湖先生を偲ぶ」『古書先賢』（近藤啓吾著、拾穂書屋蔵版(私家版)、1982.6）
- 『平沼文庫蔵書目録』第2輯（無窮会編、無窮会、1961.3）
- 『紫峰 望月茂を偲ぶ』（望月千枝編、望月千枝、1976.4）
- 『土浦の古文書 旧土浦藩士諸家文書他』（土浦市古文書研究会編、土浦市立博物館、2011.3）
- 「名家私印の蒐集に就て」『市島春城古書談叢』（市島春城著、青裳堂書店、1978.8）



http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/

自分は図書漁りのため長い間坊間の書肆を訪ふてゐるが、ある時つくづく図書漁りの業は全く故人の展墓のやうなものだと感じた。所謂墳墓は人の形骸を埋葬する所で、それには墓石が立つて其の氏名や事蹟等が刻されてあるけれども、其人の精神の置き所でない。其人の精神は著述に就て求めねばならぬ。其の著書が其人の精神上の墳墓で、書肆の架中に折り重なつてゐる。これが形骸の墳墓よりも遙かに尊むべきもので、書物の前には自然に頭が下る。遺骸の墳墓は遠近に散在してゐるが、精神上的の墓所は書肆を訪へば、一挙幾百家の霊に対することが出来る。

図書には刻本もあり写本もあり、写本の中には著者の自筆もある。自筆本は特に敬礼を払ふべきもので、此等の内には著者自身の蔵書印のあるものがあつて、又他の持主の蔵書印の捺してあるのが多く、其の蔵書印の中には世に知れ渡つた高名の人も少なからずある。……書物漁りを展墓の心得でなしたことも、私印を故人の位牌のごとく考へたのも同系同脈の思想に由るのである。

(市島春城「名家私印の蒐集に就て」)

